

## 六二年九・三〇細胞代表者会議討議資料

## 総括

(一) ブント崩壊後の我々の活動は次の三つの分野において展開されてきた。第一は関西社会学同に結集した学生運動の大衆的展開であり、第二は大阪を中心とする左翼的職場活動家グループの社研・労研とその内部におけるフラク活動であり、第三にはこれらの大衆運動の活動に必要な独自の機能的な活動分野をうけもったいわゆる「ブント関西派」(「のちの関西ブント」)である。我々が今口、安保以降二年の総括をし我々の活動のあらたな展望をつくらうとするのは、この三つの分野における活動の内的発展から、及び我々をとりまくきびしい情勢から、いわば必然的な方向として理解されなければならない。

安保以後の二年間をみるならば、客観的情勢のいわば局面的な、かなり明確な動向に対し、反体制運動のそのあまりもの混とんとした状態はまことおどろくべきものがある。客観的情勢はといえば、それは安保後の岸一池田への日本資本主義の安定的発展(高度成長政策のバク進)局面でのパトントッチではじまった。独占ブルジョアジーの安保斗争への様々の評価は治安強化(岸一佐藤)、或は迂回的作戦(高度成長一所得倍増)等々により様々に分裂していた。それは当時の構造的改革論の推進者小野義彦をして、この分裂こそ政策転換(貿易構造等)の条件だとした見解や、あるいは日共の選挙管理内閣の提唱がだされるほどのものであった。しかしその後の選挙での第二次池田内閣の成立は一応迂回的方向を基本的方針となさしめた。三井三池斗争における石炭産業危機におけるブルジョア

ジーのへゲモニーの確保はより一層の体制が長期的なものであるかの印象を与えた。いわばこのような経済的な基盤における安定性(いわゆる「三字欠」にうしろめされた)に対しての自信に支えられた政府は、その後提出された政暴法においても余裕のある政策をうちだし、治安対策も長期的に構えること、しかもその間に新安保条約を除々に具体化・定着化させる方向に政策の重点をおいた。

だがこのような経済局面に支えられたブルジョアジーの自信回復も、六一年にはじまった設備投資過剰による国際収支の悪化によって、高度成長政策にブレーキをかけたざるを得なくなった。しかも六二年十月九〇%自由化率の達成という国際的な制限は簡単な引しめ政策を許さず、依然成長基調をとらせ、そのため景気後退期にも物価下落がみられないという特徴すらみられた。一方国際的な情勢はE.E.C.、アメリカ経済ともに過剰生産的徴候をみせ、産業部門においてはすでにそれが明確化した。ために今回の象徴的景気後退は各国において市場問題にその活路を見出す方向に軌道を一にしなから、日本経済にとつては一層きびしいものとなった。

池田内閣はこの局面においてついに第二次大型内閣から、過渡的な、次期政権問題をかかえた短命内閣としてジャーナリストに評価されるようになった。そして内部に藤山の対抗がおこりあわや参院選・総裁公選で一荒れかともみられた。だが安保斗争における大衆運動の高揚に対して迂回作戦(総評丸がかえ)の方向を判断したのは、池田とその財界のグループに加え、国際的な独占ブルジョアジーのグループ、とくにアメリカの独占グループにおいても同様であった。ために自由化と企業整備(合理化)という課題をかかえ、一挙に帝國主義的な憲法の実現に至る過程としての治安強化を提言した岸・佐藤グループを一応おさえながら、池田第二次内閣は依然として低

姿勢・丸がかえを基調としている。ただよりきびしい経済的条件での丸がかえである以上、それは必然的に階級的な、アメとムチの露骨な組合せとなり、日経連はこの事態に際し、伍堂輝夫というベテランをわざわざおくりこんだ。おいつめられ、危機にたちながらもこの状態に依然として強力な支配力を維持し、改憲への2/3の議席獲得へと進んだ独占ブルジョアと自民党を助けたのは、この間の反体制運動そのものである。ここ数年間の近代化投資、近代的労働管理体制の進展、職場活動への職制を通じての圧力、そして所得倍増の宣伝は労働者自身にも多大の影響を与えた。資本主義の否定面と肯定面の交代に対し、革新陣営のなしたことは、ただひたすらに選挙運動であった。そして指導性の無能さの故にむしろ積極的にこの体制ムードに大衆がのぞみ、無関心化することにはほとんど何もなし得なかった。

(二) さて以上にのべたごとく独占ブルジョアと池田内閣のコースが、総評を中心とする日本の労働運動、及び既成左翼の政治斗争の指導力と極めて密着した関連にあることをみなければならぬ。まず安保斗争において、次に三井三池斗争において、そして政暴法斗争において、原水爆実験反対の平和運動において、さらに憲法斗争において既成左翼は決定的ともいえる無指導・無戦術をさらけだしてきたし、現にさらけだしている。とくに最近の労働運動との関連でみるならば、安保斗争時街頭動員の政治斗争はできるが、生産点政治ストライキの打てない労働運動の弱点として理解、総括された日本の労働運動がその最強の部隊である炭労において企業整備||首切りの資本攻勢に見事に破れたことは大きな問題を残した。いわば資本主義の近代化投資、若年労働力市場の逼迫といった条件をテコとした大巾上げ、産業別統一スケジュール斗争の裏面に、

かくて残された問題は、三つの分野にわたる我々の活動の総括であり、我々がその一翼となっているところの無党派、新左翼的活動グループの総括である。

(三) 今日の既成左翼の危機、前衛の不在を明白に全大衆の前にバクロしたものは、何といっても全学連とそのOBを中心とする共産主義者同盟に結集した左翼インテリゲンチヤである。その新左翼が安保斗争を通じて崩壊したことは、それ以前の大衆運動で果した全学連の働きからして、やはり大きな問題であった。崩壊の原因は、この困難な時代であり、いわゆる二重構造といわれる日本資本主義の社会構造のなかで、頑強なスターリニズムとの斗争と(即ち真の前衛党建設)として大衆運動のトータルな発展を目的とするといった過大な任務によることは間違いない。その後のブントの分派斗争とマル同(黒寛派)への全学連中核の推移過程は、日本資本主義とインテリ左翼のつたコースの歴史とあまりにも重なりあっている。日本における真の反スタ斗争、真の前衛の結成、創造は何と困難な事業か、我々はそれを身をもって経験してきた。

ブント崩壊、マル学同の指導権獲得のコースを通じての最大の問題は全学連の崩壊である。それは情勢の推移の中で鋭い感覚を戦術で全国的な政治的大衆斗争を引きおこし、他の大衆運動にも大きな影響を与え、先進的な役割を果たしてきたところの全学連の崩壊であり、その専ら原因が先の困難さより発しているのである。

ブント戦旗派—マル学同(革共同全国委)のコースは第一に全学連の小ブル性(或は共産同の小ブル性)についての批判と自己批判、第二にその克服の方法としての反帝、反スタ、即ちソ連は社会主義ではない、八そうではなくて赤色帝国主義であるVといった方向にその理論化の全勢力をかけた。革命の通達派はその後宇野経済学

企業整備||首切り反対の斗争が重なり、自由化にむけてこれが更に石油関係、合化にも、また非鉄金属にも波及する側面としてできたのである。それは合理化として、近代的事務管理の確立として代表的な労働組合の活動スタイルであった職場斗争戦術に対抗した、学習会と日常的職場活動と政治斗争という三つの側面での最高ともいえる運動基盤をとってきた三井三池の敗北は、反合理化斗争に必死の抵抗と政策転換のコースという新しい路線をのこして敗北した。これは一方では民同の右傾化への端初となり、他方では労働運動と政党「安保斗争」との関連での政党の無指導性をバクロすることになった。全電通、国鉄等の企業合理化への事前協議制の提案、そして三池の足下にも及ばぬ斗争およびその体制の放棄は、明らかに三池以降の労働運動の右旋回を明示している。

このように斗争を指導した民同指導部は、今年において日教組、電通などにみられる急速な右旋回を示し、広汎な無関心層をその内部に生みだしつつ、労働官僚的な労働組合支配をその内部に蓄積しつつある。かかる動きに対し共産党はただひたすらに党派的(セクト的)なその政治局面における政策を打ちだし、これをひたすら組織拡充のために利用した。安保国民共斗会議—基地反対斗争—日韓会谈反対といった方針がそれである。そしてこの党の真のおろかさは、国際情勢のその後の動向、即ちE.E.Cを中心とするN.A.T.O核武装、アメリカの核実験、ソ連の核実験といった現代の核兵器実験競争の中で、大衆運動の原則もなにも無視したソ連核実験支持を打ちだすことによって最高潮に達した。石炭合理化問題にも、日韓問題と安保国民共斗で斗えば勝利する、社共統一こそがと提起し、今や社会党とのセクト的な抗争にその組織拡大の情熱をもやしており、現在の運動的危機には大きな成果をあげて前進したをくり返している。

論的学習者、及び危機における主体的要因の決定的なこと、その具体化としての戦術の要求へと傾斜した。(関西ブントのごとく主体的要因における危機を小ブル的運動のみでのり切ることがむしろ不可能であり、それは捨て石戦術であり、限界をもつといった点の指摘、反省はなかった。)プロ通派はその間においてなんとか大衆運動としての学生運動をまろうとした。我々関西グループはむしろこのプロ通派と最も近い時点から小ブル運動の限界性と同時に前衛不在状態におけるその積極的役割を追求せんとした。我々のまもらんとしたのは

- ① 大衆運動としての全学連の積極的役割、その日本における左翼運動の反権力的革命性をまもること。
- ② 前衛不在の現実がその学生運動にきわめて大きな負担をかけ、その指導部がいれば擬似前衛的な性格をもたねばならず、それがまた運動の発展のための必要条件でもあること。
- ③ 小ブル性の批判、自己批判、ソ連論などは、①②のごとき学生運動の発展の条件を獲得する中で民主的な綱領討議、組織論討議として処理せねばならぬこと。
- ④ 安保斗争の敗北は相手にも深く傷を負わせたものであり、いずれにしても再度の決戦は見通される。故にこれに向けて、戦術的、組織的な準備を意味する安保総括が必要なこと。可能なかぎりの大衆斗争を組織すること……。

などの原則点であった。かくて安保以後の政治情勢のなかできわめてユニークな政治的現象がおこった。すなわち浅沼暗殺事件についても、政暴法についても、関西ブントと社学同はこれを一貫とした大衆運動として闘うことの可能性と積極性を具体的に示したのであ

る。これは多少とも我々のいくつかの原則に同意するグループに力を与え、今日の全学連再建のための全国社会学同再建大会に多大の影響を与えた。それは大衆運動が、客観的な政治、経済条件と具体的な斗争のオルガナイザー（組織）とによって引きおこされるものであり、その指導者としてこそフロントが活動すべきことを意味する主張となつてあらわれた。前衛不在は前衛不在、にもかかわらず、その指導による大衆斗争に匹敵するとき斗争を学生戦線において引きおこすこと、そのために目的意識的、組織的に努力すること、このような簡単な現実の今日の原則に耐えられず、疑似前衛の中に幻想的な前衛を見出すとするグループは、きわめて投機的な動機によつて革共同全国委に走つた。それが出フロント関西地方委員会の主メンバー（小川、北小路、田坂）であつたことは、新左翼運動における否定面として記憶されなければならない。

プロレタリアートの名の下に学生運動を幻想的、観念的な全国委の下請化するといつた全国委の政治路線が、その実はきわめて投機的な小ブルジョア集団でしかなく、今日においては一種のあせりのためにノイローゼに陥つたお病な暴力集団になつてしまつたことは、我々自身深く考えなければならぬ。暴力により思想を支配すること、そしてそれを簡単に信ずること、それはいわばファシズムと共通した現実の生活への絶望にすべてを還元する思想でもある。（このような観点からは改良と革命といつた問題提起もありえない）我々がこのような全学連II全国委の動向に対し、①関西及び九州（長造）にみられること、労働運動内部の大衆的な労研、社研の運動として二年間にわたる学生運動とそれら労働運動の提携 ②情勢の展開に刺激されての伝統的な学生運動の全国的統一斗争の復活への前進という厳然たる事実<sup>マ</sup>に依拠し、一方で全国再建社会学同の結成に

介入のもつ正しさを確認し、そしていくつかの弱点をもちつつもその進展している現状をみつめ、その中から新たな方向を見出すということは、我々の内部に秘められたまだまだ發揮されないところのエネルギーを更に新鮮な気持で引きだそうとすること、個々バラバラの活動を全体の中に位置づけること、その為の情熱的な理論学習を引きおこすことの提案を意味する。その決意はこの会議で新たに提案される書記局・組織局のメンバーの補充に集中的にあらわされるであろう。9月斗争という困難な条件のもとで憲法公聴会阻止・大管法粉碎で、9・28全学ストライキの斗いをもって立ちあがった同大社会学同と学生の運動も然り。更には大中電社研の執行部への進出と独自活動の必然性への自覚、困難としりながらも職場活動を一層つよめる決意にもえる城東製鋼、三洋電機の同志、国家権力の弾圧の予想の前に飛躍的發展II組織拡充をはかりその内部での高度の理論学習、それに裏づけされた職場活動を約束する大阪労金の同志達も、また全学連OBの広汎な結集の一応の促進も、十月に予想される全国的な学生運動も。

同志諸君、本日の会合はこの関西ブンド系新左翼の代表者の結集である。我々の結果をさらに全国的な新左翼の結集への一過程として一環として評価すること、ここに新たな展望ができるであろう。その為に最大限中間的な指導部をつくらなければならない。連絡は一層密にされなければならない。少くとも全国的結集にとって必要な事項のすべてがあげられ、それを解決する体制が保障されなければならない。諸君の御奮闘を期待したい。

支援の体制をとり、他方で困難な労働運動内部の左翼グループへの指導体制を検討することは今や緊急の課題となつてきている。

（四）以上のごとき我々の思考の発展は我々自らの反省をも含むものである。我々のこの間の大衆斗争の指導は、始めて自然発生的な旧ブンド員及び新たな世代の活動家によつて支えられてきた。そしてその最大の弱点はこの間を通じて、戦術左翼としての存在の主張そのものの貴重さを知りながら、しかし一面ではそのこと自体におぼれる傾向があり、最も大切な問題である理論的思想的な斗争の領域においてかけることがあつたことである。特にソ連論は大阪のグループ、九州長造、東京先駆のグループの間に一応のこだわりを残したままであるし、また組織論において、自由な、自立的な新左翼の組織の自立的発展に中心をゆだね、それが結局は理論低下をもたらしているのである。それは関西ブント員の内部にも必ずしも簡単な解決をもとめて全国委へ移りかわるもの以外に、革命への前進に対し動揺を引きおこし、右翼ムードをもたらした。前衛としての不勉強は能力不足という小ブルの自己弁護の論理でおおわれる傾向がつよまつた。

労働運動内部のブンド員はともすれば異色の職場斗争家以上にすることができなくなつた。

機関紙の発行はそれが武器としてよりも10号において慣習化する傾向がでてきた。会費は納入があまりいまいになり機関紙・通達もおくなくなつた。

以上の傾向はそれこそ一貫した、系統的な努力のむづかしさ、意識的に組織的な活動のむづかしさ、そしてなによりも何よりも資本主義に対する深い理解のむづかしさをあらわしている。ここで我々は、この二年間の先述せる如きいくつかの原則による政治道程への

## 方針

### 一、当面する同盟の政治的方向

① すでに総括および情勢分析においてみたごとく、ブルジョアジの政策自体が超反動化への準備段階としてむしろ大衆内部に浸透しつつある情勢は我々に極めて困難な任務を課している。我々はここで全体として帝国主義的秩序の創造過程の準備がどのように着手されつつあるかをみてきた。それは憲法改定I法制面の準備として現象的に把握されるものが実は具体的秩序の創出を背景におしすすめられるものに他ならないことを示すのである。

昨春の春斗ののち、日経連事務局が発行した賃金白書において、いわゆる屈服賃金への報復手段は安定賃金と職ム給であるとのべたブルジョアジの決意は着々と実行されつつある。新日窒水俣の斗争が今春斗における資本家の安定賃金方式による回答に対する「安賃粉碎の斗い」であることは有名であるがそれに対する太田、社会党成田政審局長までも動員しての斗争指導も依然として「反独占」斗争というつかみどころのない幻想斗争、労働者のエネルギーをただ無限に吸収しつくして何の反応もおこさない斗争に変化しつつある。賃金斗争、首切り反対斗争がいわゆる権利斗争を内包するといわれるのは、階級斗争内部の発展要因が単なる経済的要求であるのではないこと、むしろそのブルジョアの意図そのものに対する対抗意識としてあること（安賃の場合は、事前協議制以後の労働運動における階級休戦の意図をふくんでいる）を示唆するのであるが、ここにおける民間の問題設定の誤解は経済斗争規定として一方ではあ

らわれ、左派および共産党の誤解は斗争に対する無原則的な政治性の附与としてあらわれる。それらは経済斗争方針における誤謬であるというよりはむしろ階級斗争総体として政治主義をいかに貫くのかという視点、その活動の欠如に戦術的準備のなさが決定的なものとしてみられている。既成左翼における、かかる政治斗争に対する恐怖と誤謬は日本階級斗争の巨大な条件である。政治的課題をみつけどすといつた日常主義よりもむしろ政治斗争、政治的課題へむけて特別の活動が組織されねばならず、その活動は職場斗争における斗争の徹底化を通じてのフラクの形成、政治思想宣伝と資本の諸政策の具体的暴露の組織化である。だからそれは工場新聞発行、政治ピラー学習会、討論の大衆化における合法的民主主義の最大限の利用、を通じて一定の政治委員会への労働者大衆の結果を組織し、外部における大衆運動の周期に対応して徐々に運動を展開し連絡を拡大してゆくものである。たとえば賃金奴隷制の廃止がそのなかで無媒介的に論じられるのではなく、また斗争請負業たる既成左翼の本質が単なる打倒対象ではなく、そのどこに深刻な問題が潜在させるかの政治的総括をおこなう過程で政治斗争への必然性が前面におしだされねばならない。

② またたとえば今年四月以降の政治情勢のなかでのいわゆる憲法問題に対して、左翼諸潮流から象徴的にもそれぞれの見解が提出された。日共は、憲法改悪の把握そのものからして植民地支配の強化であるとししかも改悪反対斗争を個々の具体的反動化に対する斗争に民主主義斗争に日共綱領への位置づけ、という歪曲と卑劣化によって完全にブルジョアジイの意図を過少評価した。平和的民主的条項の完全実施論がそれである。他方構造改革、社会党はいわゆる

い。「マル同憲法革命派」なる分派の成立はそれを証明した。これにみるごとく、そしてまた憲法のもつ意味と当面する支配者階級の日本全体主義的支配確立の意図―それはいつまでもなく世界的経済再編成と日本資本主義の対外進出を必要とする過剰投資に規制されたものである―からして、憲法改定問題はさまざまな問題をはらんでいる。ブルジョアジイによるプロレタリアートの支配確立が個々の諸反動攻势によってなされ得ず、むしろ国家的支配体制の危機をもたらしうるような一点をのこしつつ現在に至っている点、そしてたとえば徴兵制の確立といった国民支配の決定的場面を政策として提出しえない点、行政権の弱体化、などの諸点および来るべき自民党超反動派の出現が具体的日程の問題にならうとしている点を考えても憲法問題はきわめて重要である。戦後日本の社会構造、国家統治の問題を前面に露呈することのないようにとの支配者の意図にもかかわらず、結果としてはそのような問題として改定問題は提起されねばならない必然性をもっており、したがって左翼分派の再解体・編成もふくめた問題としてこれが理解されねばならず、その意味で改悪反対斗争の方針は決定的な重要性をもつ。五月以降、我々はこの方針において他潮流に対する優位性を保持しつつ、「帝国主義的憲法の陰謀粉砕」に集約的に表現される内容を提起してきた。それは一言でいうならば憲法改悪を帝国主義的国家編成としてとらえ、戦後国家体系の改変をその内容としてもつてあらうこと、

かかる支配者の攻撃に対するプロレタリアートの自衛権の問題を予想したものであったが、いま中央公聴会を終えた憲法問題が、むしろ自民党内部で着々と準備されはじめている段階にいたって、むしろ具体的な政治過程で改憲への準備というよりはあらたな秩序体系創造の作業がおしすすめられつつあることに注目しつつ、我々の側

護憲論に平和憲法擁護の方針をもってブルジョアジイと対決しようとしている。すなわち、根本的には戦後民主主義の成立が日本国憲法において定立され、以後の歴史過程のなかでその憲法に定められた理念が空洞化しつつ現在に至っている。だから憲法擁護の斗争が必要だという直線論理の根本にはまず第一に憲法そのものに対する評価の問題、第二にそれからくるところの決定的改良本質と無方針がかくされている。憲法そのものが他の法律と異り、根本的な価値体系自身の一表現であるとするならば憲法に対する評価とは、すぐれて本質的な思想的理論的評価として、いかにえるなら社会的統治体系をいかに把握するかという問題として必然的に結果するのである。だから一國の憲法そのものを守るとは、その國の統治の体系擁護、すくなくとも現状維持を意味する。護憲、と書く代りに彼等はブルジョアの利益をまもれと書かねばならないし、しかもそれだけではない。憲法をひとつの理念において把握するおそるべき少女趣味は理念が理念として存在するのではなく、現実の秩序、まさに資本の鉄鎖となって存在することを知らない、そのために理念を守ろうとする運動は美しい理念を追求する場が国家の本質においてあることを暴露しえず、支配者の側面攻撃によってむしろ粉砕されるのである。しかもなお人々にはかかる理念を守る斗争、ひとつの統一された理念において闘うのではない。(資本主義社会の意識の不均等発展はいうまでもなく)だからある理念の説明による斗争は必然的に統一戦線を形成する条件をまず第一に失うのである。そこに至るまでに早くも馬脚をあらわしたのが、革共同全国委である。反帝反スタ綱領から演繹した憲法斗争方針を見出せなくなるやいみじくも彼らは絶句していった。憲法論争にまきこまれたのは誤りであった。だがそれは黒田一家の誤りではあったが、大衆の誤りではな

の組織的準備を開始しなければならない。それは憲法斗争実行委をつくることになったことにはないところの、長期かつ現実の政治過程の全体を通じた作業である。むしろその組織化における上述の憲法問題に対する意識的把握こそが重要である。

③ 所増増、高度成長政策から人造り国造り政策への転換は池田内閣を前面におしたてて日本支配者階級のなみなみならぬ決意の表明であるとみることができ。戦後まもなく憲法制定後二年もたぬうちに改憲論争をもってはじまった憲法改定の動きを、はじめて公聴会という具体的日程のせ、公然と前進させようとした時期とかかる政策転換はたとえば政暴法―公安条令の拡大強化、と同じ政治的周期の事件である。たとえば大管法に集約的に表現される政府の意図はかかる同一周期において理解される。大管法改悪が、いわゆる教育のブルジョア支配(たとえば産学協同のごとき)一般と区別されなければならぬ点、それが明確な思想の権力支配としてそこに重点をおかれたものとして提起されている点である。大学の国家支配は、ある大学教授が、政府はこれ以上何がほしいのだと叫んだといわれるほど完全に貫徹している。旧文部官僚による事ム局―予算の掌握、学生部次長配属、等々。残されたもの、それはただ教官と学生の意識の支配のみである。いわば大学そのものは、支配の意識に対する伝統的反抗をもって成立し存続した。それはブルジョア社会の興隆期における、封建的なものの克服という近代市民の特性をいかに培養するかという点における機構の性能であり、存在理由であったはずである。ドイツにおける、明治時代における大学の自治、学問の自由はすべてかかる性能を保障するものとして存在した。自由と自治一般が重要なのではなく、まさにかかるためにこ

そ重要であつたろう。しかしブルジョア社会の一定の発展段階では意識の自己運動マルクスが指摘し、そしてレーニンがそれを革命的目的意識性として用いたがブルジョア社会の体制的要求とは外化された運動として展開される。支配の意識が危機的になるところのかかる情勢には意識の支配が体制側の熾烈な要求として提出されるのであるが、それはつねに既存の体制内における問題処理によって危機が回避された。学問の自由、大学の自治の論理はそれ自身一個の価値体系であるからであり、その論理から派生した意識自体が一個の価値体系を前提とする基盤をもたないからである。だから学問の自由、大学の自治のために反体制意識が粉砕されるのは決して不自然ではなく、当然あり得ることであり、かつての歴史的経過はそれを示している。ただここで反体制意識の勝利する途はただひとつそれが自由と自治問題からはなれ、対政府斗争へと展開される大衆的意識の力学のなかにおいてのみである。

大学が革命の場になつて、と池田に云われて驚天したのは、ブルジョアジーではなくて、既成左翼および革共同全国委員マル同の諸君であつた。前者はただちに権力の挑発を避けよと云いだす始末であつたし、後者は大管法非全学連弾圧だという恣意的分析をはじめ、例のごとき反スタ方針が貫徹しなくなるや、分解をはじめたのである。いわゆる構改の諸君にいたつては、自由と自治論争でもって斗争を学園斗争へ学生の権利意識向上と名うたこととすることをはじめた。日共の諸君はさらにそれを多少化し、日韓会談を自己の党派的位置づけで前面におしたために大管法非自治自由擁護斗争であるとした。さきにもべたごとく、大管法自身がブルジョアジーにとっての階級の課題、しかも必須の、人造り政策のほとんど唯一の要所なのであり、たとえば日教組の経済斗争主義への右傾化

のなかで、日本階級斗争としてこれを斗いぬく部隊が学生運動だけであることを確認するならば、全国的な組織的理論的活動を軸に関西社会学同の全関西規模での斗争展開の努力は何としても払わねばならない課題であり、全国的政治問題化へと展開しなければならぬ。当面する大管法の問題点は自治・自由問題を回避したブルジョアジーによって学長権限強化といった方向をとりつつあり、国大協案への総なだれを断固粉砕しなければならぬ。

大管法斗争における巨大な危機は、政治的契機を政府・中教審・国大協のボス取引のなかに埋没させ、それを大衆化しえないところにある。それとともに社共とくに日共が自己のセクト的主張をまるだしに社会党・総評と日韓会談斗争のなわ張り争いに熱中している情勢が考慮されねばならない。日韓会談におけるかかるセクト争いは去年八月におけるソ連核実験、今年のもろ水禁大会における主導権争奪戦が決定的な問題になつて、ソ連核実験（六字欠）

外交政策を無条件支持、ソ連擁護、平和の敵アメ帝と並べたてた一方的主張はいわゆる大衆追従を旨とする社会党のうけ入れるところとはならず、双方とも組織問題のみに問題を限定した不毛な党派斗争をくり返してきた。それは米ソ核実験反対を反戦斗争のためにたたかう、という革共同マル学同の方針と軌を一にした発想であつたが、それらの一切を通じて根本的に欠落したものは日本における平和運動の論理とその持続性は大衆斗争に対する正当な評価であつた。

日本における原水禁大会を中心とした平和運動の展開の歴史はいうまでもなく第二次大戦における原爆被爆という歴史的事実によって制約され、その後の運動の展開がかかる戦争体験を軸に進展した。

平和運動を全一的に支配しようとした日共が、平和運動における政治性の捨象という、うらがえしの政治主義をもって方針を提起してきたことはむしろ日共の命とりでもあつた。平和運動そのものは革命の論理と無縁であることをどれだけ強調しても運動の前進にとって有益であるものはない。むしろ大衆が要求するもの、それは核実験反対・平和運動の展開を通じて平和を守るための方針、真に有効な方針なのであり、それゆえに指導は大胆にそれにこたえねばならない。大衆に語ることは、平和を守れとお説教であつたり、地球上のどこかが平和を守ってくれと説明することではない。平和を守るためにはこれこれのことをすることが重要なのであると語る内容がまず大切なのである。だから平和の問題はすぐれて階級の問題としてあらわれる。ここにおける戦術提起があつて重要である。

大衆の平和運動が暑い日中の行進であつたり、紙のつみ重ねである署名であつたりしたが、それが一定の政治的行動・自国の支配者階級に対する斗争として展開されたことはなかつたことは以上の当然の結果であるといえ、深刻に総括されねばならぬ側面をもっている。世界的同時的規模での大衆斗争が資本主義の循環局面に内在する危機の表現として受取られず、安定期の平和ムード要求の小ブル斗争としてしか把握されていない方針は徹底的に検討されねばならない。もとより平和要求の小ブル斗争として出発する斗争が、国民的課題をかかげた運動から階級の課題をかかげて展開される過程を具体的戦術（自衛隊核武装阻止、大衆デモ・核反対、などを基点にした）を通じて追求してゆくことが我々の平和運動に対する視点でなければならぬ。

以上を総括した我々の基本的な政治方針は大衆斗争における、反

帝対権力大衆斗争としての斗争の徹底的展開と、同時にそれと平行したところの各工場、職場、地域における階級の政治的思想の宣伝と組織化・政治委員会の内容をなすものである。日本階級斗争における戦前の戦略論争の不毛さを総括した共産主義者同盟の崩壊後、その不毛さがふたたび左翼を侵しつつあるとき、我々の展開した運動はかかる不毛さと決定的に対決したところの大衆斗争であつたが、この方向を基本的に確認しつつ同時にかかる斗争をみずから支える基盤を創出しなければならぬ！

## 二、当面する組織的課題

同盟発足以来の政治情勢の転換と具体的弾圧の表現は、当然のことながら今後の同盟活動におけるかなり強力な強制力として作用しつつある。大衆斗争の段階における、具体的機能的表現をもつての政治過程への参加が、いわば戦後の民主主義がひとつの社会構造としてそのまま体制内移行をとげようとする段階の諸要素に制約され、それだけでは困難になりつつあるというよりはむしろ全体的深化の要素を付加せねばならない段階をむかへつつある。

### ①

安保斗争以後「経営者の15年」へむけての諸政策は、最大の焦点であるところの過剰投資・対外進出と世界資本主義との関連のなかで要請される自由化・合理化の問題を当面の課題として設定している。しかしかかる諸政策の現実的政治過程への参加は何をおいてもまず国家権力を伴うところの国家的支配として究極的にはあらわれ、当面それはブルジョアジー自身からの直接攻撃であるというよりは、反体制運動全体が分断化と右への統一志向を展開する過程として特殊的には表現されるであろう。

国家的支配の準備は、たとえばドイツファシズムの興隆期にお



そのものに依拠するという理念からまず何よりも、「社会主義」極楽浄土」式宣伝による大衆的支持層の確保、しかも市民的利益の保護・伸長の積み重ねが社会主義政党のきわめて重要な任務であることとをきわめて無媒介的、非階級的な問題提起によって主張しようとする。その根底にあるものはいうまでもなく安定期における資本主義そのものへの根本的意識的信頼であり、あるイミでは保守政党以上に利益団体化への可能性をもつ以上、その崩壊は資本主義社会の再編期においては、むしろまるまるの反動化としてあらわれる。そのイミにおける転換は、いわゆる失業者政党共産党においては、統一戦線における「ことばにおける急進派」として出現する。一方人の中では「左派」であるが、十万人の中では何のイミもたない団体として、革共同全国委はその縮小版である。

大衆的影響力の保持とその革命的展開のためにこれまで我々が大衆斗争として展開してきたその内容は、むしろ戦後民主主義の自然発生性を前提とした意識性であったが、かかる見地と情勢分析の検討からみても判るように、ブルジョアジーの政策技術、その密度と速度の如何によっては、反体制運動自体が全く機能しえない可能性を現実のものとしつつあることは我々にとってきわめて重要であり、それへの対応は、たとえば大衆的規帯でいかに運動の歴史的視点をつくりだすかといった方向でのかなり高度の意識性を政治的理論的次元で展開することによってなされねばならないであろう。運動の次元をさらに拡大し、展開すること、それはより根底的な政治斗争そのものの創出母胎の形成志向と密接に関連するのであるが、全体の展望へ向けての問題意識性としてあらわれる。そのイミで「綱領への前進——討論組織」は第三の重要な課題である。

る方法自体はかかる問題の再設定によって全く消化させられるか、部分的なものとしてしかとどまり得ない。それは現情勢下の学生大衆斗争の展開という観点からするならば、必然的な問題設定としてあらわれるからである。(たとえば投機分子の存在といった問題は、もはや投機分子自身の間のみの問題となりつつある。)そして来るべき大管法斗争とマル同の分裂といった情勢、および去る9・19、28の斗争を通じてわれわれが主観的にはどのように目的意識性を追求していたにせよ、客観的にはその作業が全くなされていなかったと総括せねばならぬこと、などからみて、社会学指導の問題は以上の諸課題に附属したもつとも前面におし出された重要課題である。

それと並んで労働運動におけるたとえば電通労研の全国的組織の確立、労対グループの連絡強化はそれぞれ意義ある作業であり、また緊急の課題である。企業内左翼として、労働運動の具体的分析―職場活動の徹底化―職場フラクにおける思想宣伝強化、政治情勢の全面暴露、階級意識向上―学習会、政治委員会組織、の各段階を強化し、各地における独立新左翼との交流―組織化、既成左翼良識分子への介入、を通じて全国化活動を展開しなければならぬ。かかる大衆的政治委員会は、同盟組織局および大衆運動部(労対・学対)によって集中的に掌握される活動が展開されるであろうし、他方における綱領討論はかかる諸活動の成果一切を集約して展開されるであろう。そのためにも、かかる一切を結合する糸―通達、機関誌の定期発行は重要であり、活動規模の全国化に伴い、それは我々が新左翼として政治舞台に登場しつつある意識的準備なのである。その活動を保障する最底の問題として同盟費の決定、上納は第四の重大な課題である。

③ 学生運動における社会学同全国化の問題はその意味ではまず大衆斗争段階における政治指導の全国的視野への飛躍の要請としてあらわれたのみならず政治指導部隊の全般的(理論的組織的)検討としてあらわれたのである。だからそれは、学生運動全国化へむけて社会学同全国化がどうであるかという問題であるというよりはむしろ、労働運動もふくめた全国的政治指導がどうかという観点から考えねばならぬことである。そのことについては、とくに学生運動における特殊な要素をそこに附加して考える必要があるだろう。大学によって異なるとしても、まず四年以内の時間を一周期としておける運動指導者参加者の世代交替と、とくに全国的指導と運動の展開を必然とすること、形式的にもせよその中心が東京であり、そこにおける分派斗争の状況の固定化、などがその問題である。かかる諸問題を軸に動いているはずの学生運動において、基本的なその動因は単なる人間関係、単なる投機分子の存在、あるいは大衆斗争における方針の問題、全国的連絡の問題、などではなくて、それらはすぐれて安保以後新左翼の基本的課題―党建設の問題をあらゆる形で表現しているのである。それはいわば党と大衆団体という形式化された形ではなくて、もっと原始的な、組織性意識性の面で問題が整理されない、たとえば個人的解決といったことに解消され、固定化される。だから大衆斗争方針すらも政治情勢のなかにおける集約性をもって表現されることはなく、いわば自治委員会段階でとどまり、それ以上の段階の集約が指導者の頭の数だけあるという情勢は何よりも外部から、しかも大衆的基盤での問題の再設定をもって打破される必要がある。東京都における社会学同再建は全国指導部のまず第一の任務であろうし、その過程で一切を党的組織の観点から発想す

#### 同志諸君。

以上の基本的諸方針においてさらに各大衆斗争部、サークルとして具体的政治方針(戦術)の討論を組織することは我々の運動にとつてきわめて重大な意味をもっている。しかし今日ここで我々が確認しなければならないことは、かかる討論と運動の展開を前提としたうえで、それらを総体として我々が閉鎖性と個別性を打破し、全国的活動を展開する新左翼として運動を開始する、ということである。たしかに、大衆的政治権力奪取斗争を全国的に成功裡に展開した歴史的経験をほとんどもたない我々にとって問題はきわめて困難である。政治斗争展開の、前衛党建設の、単一元的発想、情勢把握における単眼性、行動における規律と思考における根底性の欠落、そして何よりも資本主義への対応密度の問題―運動としての把握における作業の未完成と無政府性、それらはみずから問題提起の場と内容を限定する。ここで我々の立場は、世界へ自己を加入させることではなくて、自己を設定した世界全体を対象とし、それを検討することからはじまる。世界全体の拡大とその内部における自己活動の統一的把握、しかもその外部からその自己活動を操作する活動の把握、の場面をどのように切りひらいてゆくか。我々の当面する任務とは、かかる情勢を新左翼の同志諸君の運動全体として把握し、そのまに大胆に問題を提起すること、運動全体として占めるべき正当な位置を占めることである。そのためにも以上の諸課題の実践的展開は重要である。同志諸君の熱烈な討論に期待する。